



瀬戸復興副大臣（手前右）に震災復興新聞を贈る関口さん（4日、復興庁で）

福島は今 学生が新聞に

神田外大生 現地取材

東日本
大震災
15年

神田外語大（千葉市美浜区）の学生が、東日本大震災から復興する福島県の現状を国内外に発信しようと「震災復興新聞」を完成させた。4日に復興庁を訪れ、瀬戸隆一・復興副大臣に贈呈。新聞は11日に福島市で開かれる「東日本大震災追悼復興祈念式」（福島県主催）の

会場に展示するほか、来賓控室に計300部を置く。震災復興新聞を作ったのは、柴田真一・特任教授のゼミ生19人。学生らは昨年8月、原発事故と津波で甚大な被害を受けた福島県の浜通り地域を訪問し、「東日本大震災・原子力災害伝承館」（双葉町）や「トロピカルフルーツミュージアム」（広野町）などで取材した。復興の歩みや地域の現状を「福島とともに」と

いう題字の震災復興新聞（表が日本語版、裏が英語版）にまとめた。コラム「希望のとびら」では「震災からまもなく15年。復興を遂げるには多くの課題が山積している」と指摘。ゼミ生のリーダー関口椋久さん（21）は「復興に関わる人が不足していると感じた。新聞を通して福島現状をまず知ってほしい」と話した。1月には内堀雅雄・福島

県知事にも贈呈した。内堀知事は「素晴らしい取り組み。海外への発信にもつながる」と評価したという。